

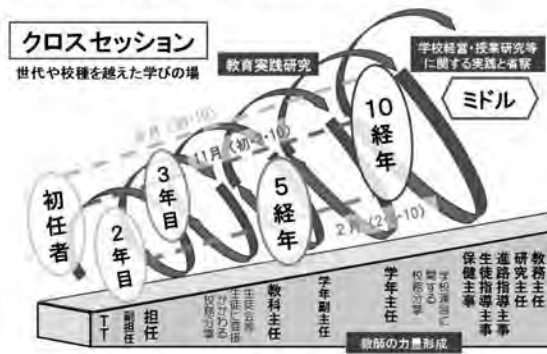
基本研修クロスセッションの効果について —求められる教員の資質能力の向上を目指して—

クロスセッション：校種や経験年数を越えた小グループを編成し実践や考え方を討議する場

クロスセッションが導入され3年目、若手教員研修が導入され2年目となる今年度。これまでのクロスセッションは、いずれも参加者の満足度は高く、福井型18年教育を意識することの大切さに気付くなどの成果をあげている。今年度は、教員に求められる資質能力について、自己評価を通して効果を測り、今後の充実につなげる。

教員の資質能力の向上、学び続ける教員の確立

基本研等の流れ 実践の省察と展望



実施月 テーマ	対象者と 準備物（レポート）	ファシリテーターと協議内容
8月 10年後に目指す 教員像	初任者 10年後に目指す 教員像 10経年者 10年間の振り返り	ファシリテーター：10経年者 初任者に対し、10経年者が経験をもとにアドバイスし、 目標を明確にする時間とする。10経年者に若手を育てる 意識の醸成を図る。
11月 事例研究	初任者 授業実践研究 10経年者 教育実践研究	ファシリテーター：教育研究所員等 初任者の授業実践へのアドバイスの他、校種間連携を 意識して他校種も意識した協議を目指す。 10経年者は具体的な問題事例を提示し、初任者とともに 解決法を考察・議論する。協議を深める中で答えを紡ぎ 出していく、高度な活動となる。
2月 授業実践	2年目 授業実践研究 5経年者 授業実践研究 10経年者 教育実践研究	ファシリテーター：10経年者 2年目、5経年者に対し、10経年者はアドバイスを するだけでなく、自らの成果や課題をも明らかにしながら、 授業改善への意識を高める。 自己の実践を記録し、他者との交流を図りながら、実践 内容を再構築する。実践・振り返り・改善のサイクルを身 に付け、学び続ける教員の育成を目指す。

効果を測る方法

福井県の基本研修において教員に求められる資質能力を「豊かな人間性」「高い専門性（教科指導、生徒指導・進路指導等）」「マネジメント」「変化への対応」の4項目としている。
10年経験者研修で実施している自己評価表をもとにアンケートを作成した。11月のクロスセッション終了時に実施し、クロスセッションに参加して意識が変わったり、身についたりしたと思う点について調査した。



成長をはかろう！[クロスセッション自己評価表]アンケート項目/結果

評価項目	評価する事項	初任者	10経年者	
豊かな人間性	① (教職全般) 高い倫理観・幅広い視野	58%	46%	
	② (教職全般) 教育の現状と課題の理解	55%	36%	
	③ (人権教育) 人権問題の理解と、確かな人権感覚	32%	22%	
高い専門性	教科指導	④ (計画) 個に応じた指導方法の工夫	79%	59%
		⑤ (授業) 興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習の工夫	70%	44%
		⑥ (ICT活用) ICT機器などの授業方法の工夫	61%	48%
		⑦ (学級・児童生徒把握) 児童生徒の実態に即した、修正や改善	67%	56%
		⑧ (評価) 指導の改善や学習意欲の向上	32%	19%
	生徒指導	⑨ (言語活動) 言語に対する理解や関心を深めた言語活動	50%	30%
		⑩ (家庭学習) 家庭学習などの自主的な学習態度の育成	28%	16%
		⑪ (進路指導) 自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択	21%	27%
		⑫ (生徒指導) 生徒指導について、充実に向けた考え方	44%	46%
		⑬ (生徒指導) 教育相談の手法を理解し、好ましい人間関係づくり	65%	55%
マネジメント	⑭ (生徒指導) 障害のある児童生徒の教育ニーズの把握	56%	50%	
	⑮ (組織マネジメント・協働) 他教員との連携協力。報告・連絡・相談	76%	53%	
	⑯ (自己マネジメント) 個人の役割を理解し、自己マネジメント能力	42%	30%	
変化への対応	⑰ (今日的課題) 校種間連携など今日的課題への取り組み	28%	38%	
	⑱ (危機管理) 事故や問題への対応。個人情報保護。	60%	36%	
	⑲ (家庭・地域・関係機関との連携・協力)	46%	39%	
	⑳ (社会の動向への対応) 新たな工夫・改善	37%	20%	

初任者・10経年者ともポイントが高い項目

- ・授業実践に関して、お互いの受講者が持ち寄る実践と関連する項目でポイントが高い。
- ・幅広い観点でグループ協議が行われている。

初任者・10経年者ともポイントが低い項目

- ・協議で話題にならない項目の効果が高い。
- ・実践研究との関わりが見い出せにくい。

10経年者が初任者よりポイントが高い項目

- ・10経年者の課題レポートや選択研修との関連が大きい。
- ・研修でのマネジメントや分析方法を発揮しようとしていた。

成果

- 幅広い項目で成長を認識
- 授業改善への指針
- 中堅教員としての意識の芽生え
- 教員の協働の大切さを認識
- 危機管理への対応

課題

- ▲10経年者の学び
- ▲研修後の実践と効果の検証
- ▲自己評価をもとにしたテーマの設定

「通信型研修」の開始と今後の課題 - Moodleを活用した次世代型教員研修への挑戦 -

研修部 授業改善研修チーム 通信型研修担当 山口 明彦 田嶋 基史 小森 保弘 森 三穂

本所では、2013年12月からクラウド環境とLMS(学習管理システム)を活用した次世代型の教員研修の調査研究を行い、その成果をもとに2014年8月から「通信型研修」を開始した。その取り組みの経緯と研修の概要を報告する。

インターネットを活用した教員研修の低迷

- ▲ 費用対効果が小さい ▲ 予算削減で廃止
- ▲ 受講者の集中力が続かない教材内容

急速な情報通信環境の進歩と低価格化

- ◎ 高速通信回線の普及 ◎ 情報端末の普及
- ◎ クラウドサーバの利用料金の低価格化
- ◎ 高機能なLMSのフリーソフトが普及

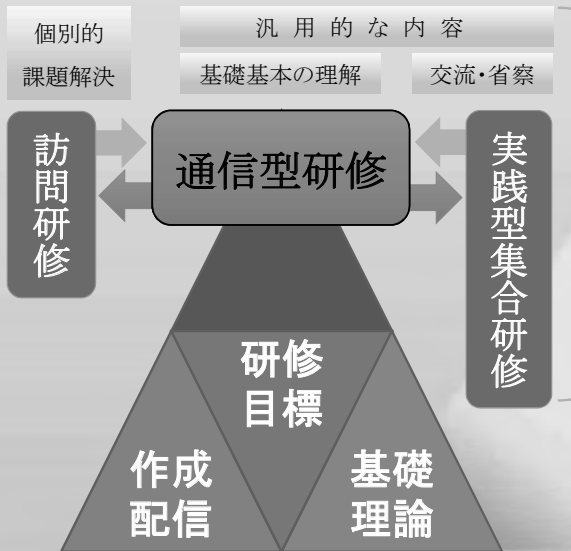
オンライン型の大学講座、ウェブ授業講座等の普及
MOOCs manavee 大学でのネット授業 反転授業 等

平成26年2月「福井県教育研究所機能強化策の提言」

教員が学校や家庭でいつでも自己研鑽できるよう通信型研修を整備することが期待される(100講座)。その際には、全ての教員が、経験や職務に応じて全プログラムを履修できるよう、受講レポートの提出や受講履歴の管理を行うシステムの導入を検討すべきである。

新設 通信型研修 コンセプト

いつでも、どこでも、どんな端末でも自己研鑽ができる
クラウド環境でのシームレスな教材動画配信/LMSを活用した履歴管理/他の研修形態との接続と連携による研修効果の向上



福井県の教職員研修は、3Dの時代へ！

集合研修と訪問研修という2つの軸に、通信型研修という新たな軸を加え、教職員研修が「3Dの時代」へと進化する。

通信型研修を支える基礎理論

「いつまでたっても、誰も、何も見ない」研修にしないための理論

成人教育論「P-MARGE」

- ・大人の学びは、子どもの学びと同じではない。
- ・実利性や目的志向性等を重視すると、研修効果が高まる。

インストラクショナルデザイン「ADDIEモデル」

- ・「分析」「設計」「開発」「実践」「評価」の5つのプロセス。
- ・研修教材の質の向上や内容の改善を進めることができる。

インストラクショナルデザイン「ガニエの9教授事象」

- ・始めに注意喚起やゴール提示をすると、学びやすい。
- ・演習や小テストを配置すると、理解の定着度が高まる。

通信型研修の教材作成と配信方法

教材作成の基本型

- ・10分程度の動画教材4~7つから構成されるコースウェアとして教材を作成。
- ・著名な講師の講演記録動画については、10分程度に切り分けて教材化。

教材配信と受講管理

- ・フリーLMSソフトMoodleを、クラウドサーバ上で運用して、研修教材を配信。
- ・Moodleを活用し、受講履歴、受講アンケート、小テスト実施状況等を管理。

アカウント発行と受講登録

- ・ホームページに受講申込フォームを準備。個人申込と団体申込の両方可能。
- ・発行されたアカウント(ユーザー名とパスワード)は、退職まで利用可能。



通信型研修の申込み、ログイン画面

平成27年度以降の計画と課題

配信計画

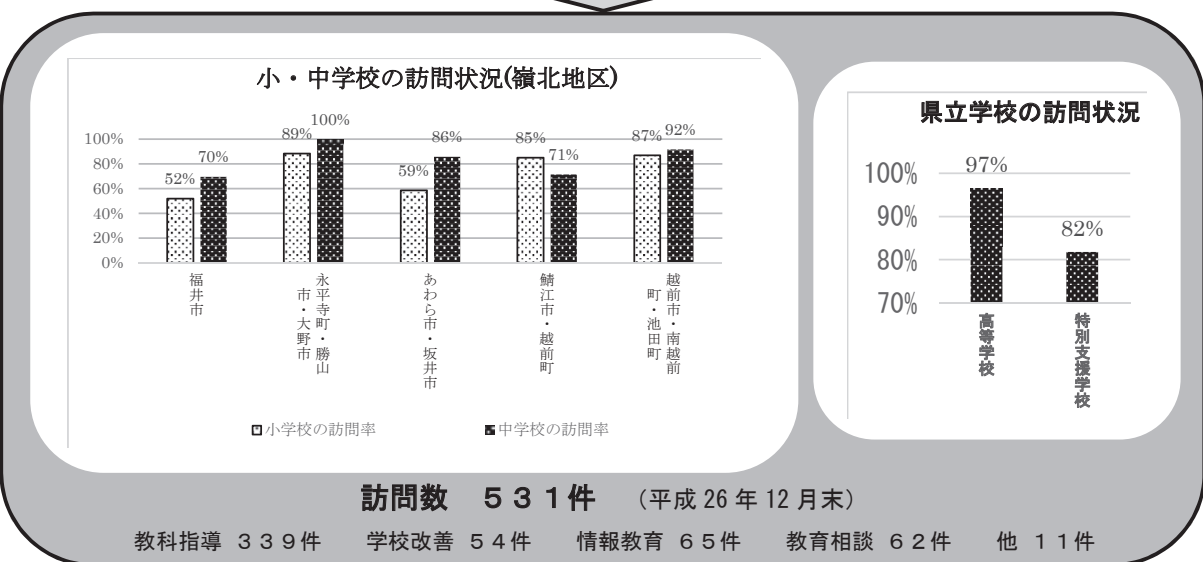
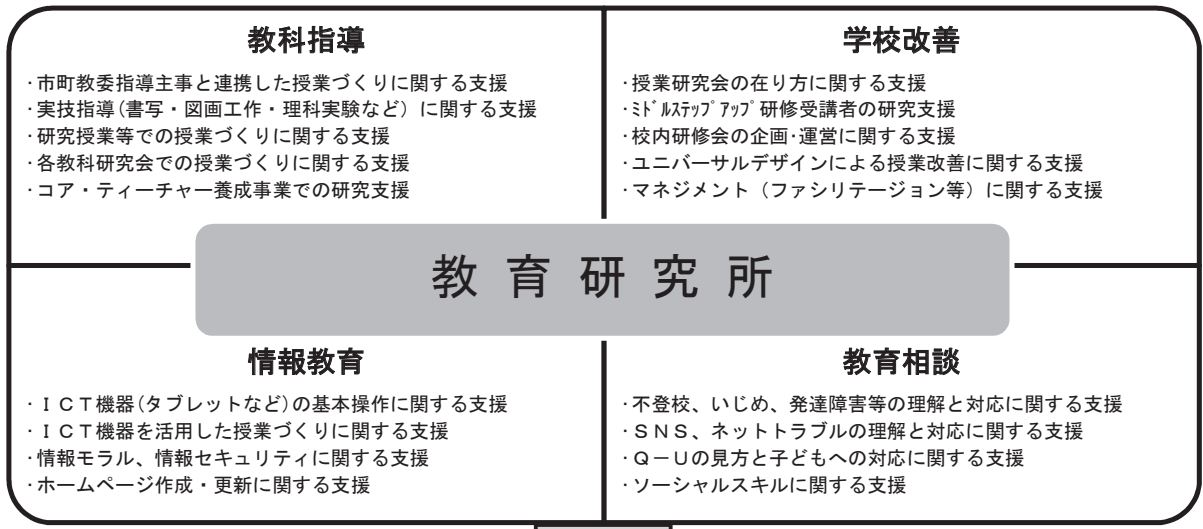
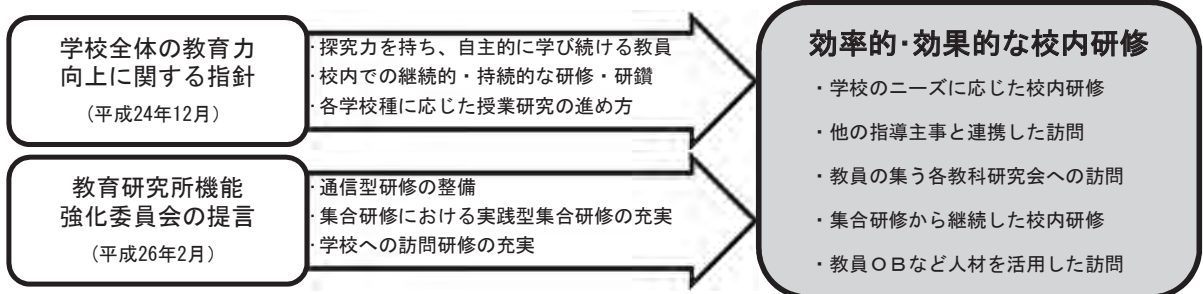
平成27年4月に60講座を配信し、同年10月には100講座を配信する。以後は、内容の改善と精選。

課題点

- ① クラウド環境の安定性とセキュリティの確保
- ② 教材の内容と質の向上に向けた所員研修の実施
- ③ 実践型集合研修や訪問研修との接続と連携
- ④ 受講登録の年度更新とアカウントの管理の検討
- ⑤ 教材作成やナレーション収録用の専用スタジオ
- ⑥ 配信教材の評価方法と改善や精選の方法 等

訪問研修を振り返って 一校内で学び続ける教師を支援して

研修部 校内研修支援チーム 齋藤和秀 富澤宏二 吉川喜代江 谷口恵美 林みち子



成果	平成26年度の成果と今後の課題	課題
<ul style="list-style-type: none"> 市町教委や小中学校および県立学校との関係構築 教職大学院の協力によるミドルステップアップ研修の充実 ICT機器活用に対する高い期待度への対応 集合研修等から継続した校内研修の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 新たな教育課題への対応と支援体制の構築 学校の要望の把握と効果的な支援の提案 学校で校内研修を運営する中核教員の養成 研修指導に関する所員のスキルの向上と継承 	

「SASA2014」での新たな試みについて
 -これから必要とされる学力測定の内り方を探る-
 調査研究部 学力調査分析ユニット

知識基盤社会化
 グローバル化

PISA型学力

21世紀型スキル

SASA2014における新たな試み

マトリクス作成に基づく
 問題出題設計の見直し

過去のSASAおよび全国学力・学習状況調査における課題の洗い出し

- 過去の調査において調査が不十分である内容
- 過去の調査において、課題とみられた内容
- 平成26年度の全国学力・学習状況調査における課題に関連した内容

- ◇よりの確な課題の洗い出し
 - ・新傾向の出題の増
 - ・同一対象児童生徒の課題解決状況の測定
 - ・全国学力・学習状況調査結果への早期対応

C チャレンジ問題の
 新設

1つの観点や内容、単元、教科書の記述内容にとどまらない問題設定

- 読解力、記述力を必要とする内容
- 領域、観点を複合した総合的な思考力を測る内容
- 教科横断的な内容

- ◇新しい学力を測るための出題内容の一端を具現化
 - ・合教科型、総合型の出題
- ◇学力向上に向けた検証・改善サイクルを加速

学級集団と学力との
 相関を測るための質問紙

ソーシャルスキル（人と関わる力）の習得の中で、特に学級集団に求められるものを追加

- 傾聴力
- けじめ力
- 責任力
- 共生力
- 解決力

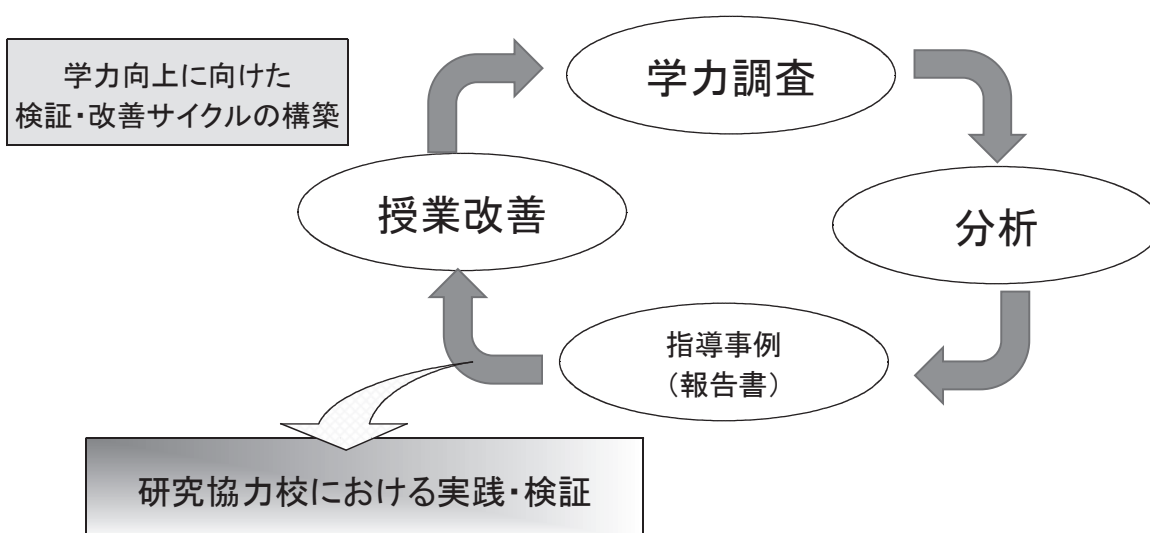
- ◇学力を向上させるための良好な学級集団のすがた
 - ・共生力がある学級（小中）
 - ・けじめ力がある学級（小）
 - ・責任力のある学級（中）

今後、児童・生徒の確かな学力を更に向上させるために

- ◆C チャレンジ問題の質の向上
- ◆C チャレンジ問題の活用の推進
- ◆社会情勢の変化に対応し、児童・生徒の学習状況を把握するための質問項目の研究開発
- ◆学級集団の状況に関する経年比較の分析

「SASA2013(第62次福井県学力調査)」の課題を克服する授業改善
-研究協力校における実践と検証-

調査研究部 学力調査分析ユニット



実践及び検証の流れ

- 1 研究協力校及び授業者の選定（小学校4教科、中学校5教科）
- 2 授業者との打ち合わせ（実践事例の内容の検討）
- 3 打ち合わせを受けての指導案、教材（ワークシート等）の作成
- 4 授業実践
- 5 授業者との研究会、児童・生徒への事後アンケート、課題が見られた問題の再調査

実践内容（例）

小学校理科

「誤答分析だけでは分からない児童の思考
に対応して柔軟に改善した実践」

- ・ 様々な方法で実験し、実験結果などを班で予想させること、また図で表す活動を取り入れることが有効であることが分かった。
- ・ 事象の確認、図示、説明、確認の実験と段階を踏む学習を積み重ねることで理解を深めることができた。

中学校国語

「新しい学力観を踏まえ、実態に合わせた
創意工夫が見られた実践」

- ・ 古典に対する意欲を引き出すことができた。
- ・ 他者との学び合いにおいて思考や理解を深めることができた。
- ・ 次の学習や他教科に生かしたいという汎用性のある学びにつながった。

- ◇問題に対する再調査は、どの教科でも正答率を向上させることができた。
- ◇児童・生徒の関心、意欲を引き出すことができ、達成感、満足感を感じさせることができた。
- ◇授業者の授業改善、力量向上に寄与することができた。

「平成26年度全国学力・学習状況調査」の分析と分析方法の研究

ー学力調査分析ユニットの役割ー

調査研究部 学力調査分析ユニット

学力調査分析ユニットの設置

全国学力・学習状況調査およびSASA(福井県学力調査)を一括で管轄、分析し、最新の教育方法の研究開発を担う。

「平成26年度全国学力・学習状況調査」の分析



まとめ

サンプル調査と本調査の分析から洗い出された課題およびその改善方法について、児童・生徒に対する指導へのフィードバックを行い、さらに課題が見られた問題についてはSASAの作問に反映することで、早期の課題克服を促すという学力向上に向けた検証・改善サイクルを構築する一歩を踏み出すことができた。

高校数学の授業改善

—タイプの異なる学習方法を高等学校に導入—

受け身型授業からの脱却
主体的・協働的に学習できる生徒の育成



教育研究所ホームページを活用し資料を共有
これらを融合・発展させ、学び続ける教員を育成

第1グループ
『予習的課題を前提とした授業』

- ・ T S Lシートによる実践
- ・ タブレットによる実践
- 進度の速まり、授業スタイルに対する生徒の不安
- 授業者の工夫改善による意欲喚起
- 学習意欲の高まり
- 理解度の向上
- 教員間の協働意識の向上
- ▲ 予習的課題設定の難しさ

第2グループ
『グループ活動を取り入れた授業』

- ・ 知識構成型ジグソー法を取り入れた授業の実践
- 「教える」から「学び合う」へ、指導観の転換
- 課題設定の重要性
- 学びの実感
- 生徒の学習意欲の高まり
- 教員の姿勢の変化と授業改善の広がり
- ▲ 課題設定、提示の難しさ

第3グループ
『ICTを活用した授業』

- ・ 興味関心を引き出す I C T 活用法の研究
- I C T は万能ではない
- I C T をどう生かすか、授業観が大切
- 数学に対するイメージの好転
- 理解の向上
- 教員の意識改善
- ▲ 継続的利用の難しさ

- ◇ 研究協力校を指定しての共同研究
- ◇ グループ会議の開催、方針の確認

授業改善の3つの方向性

1 生徒が自ら学ぼうとする学習スタイルを確立する

2 協働的な学習を行うことで生徒の学びを深める

3 変化を持たせ、「数学は面白い」と感じる授業を行う

【現状と問題点】

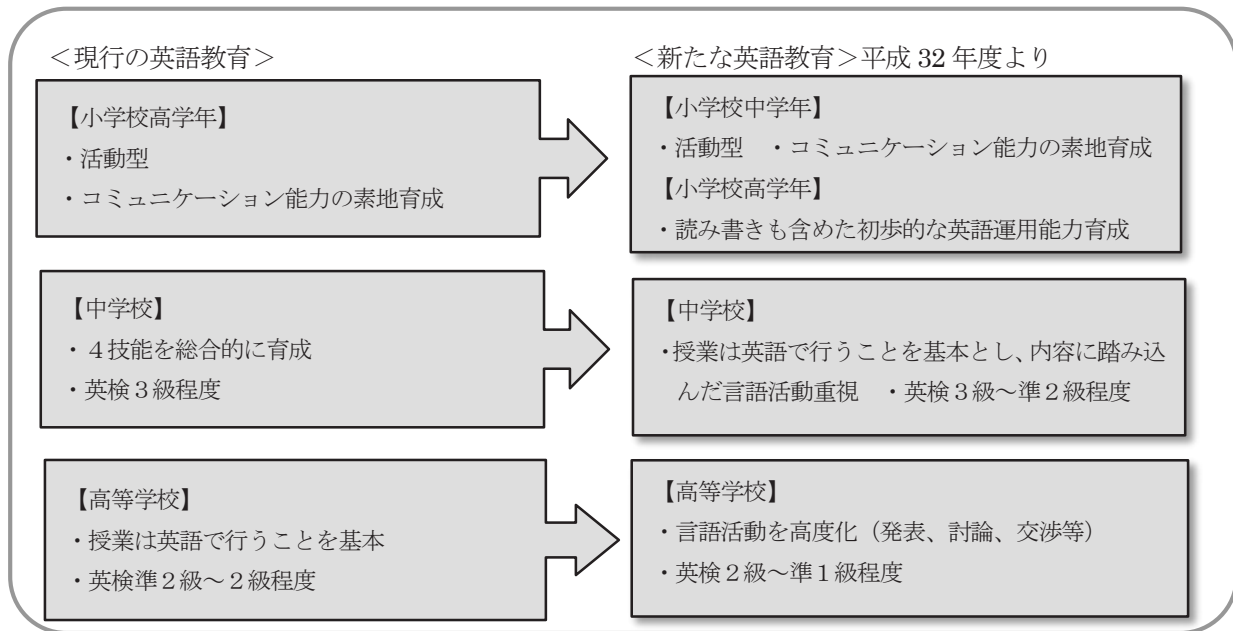
旧態依然とした講義型の授業
受け身の姿勢の生徒・数学に興味を持ってない生徒

小中高を見通した英語で表現する力を養う指導の在り方

一言語形式重視から意味内容重視の授業への転換

新たな英語教育へ

(現行学習指導要領→平成 32 年度より実施)

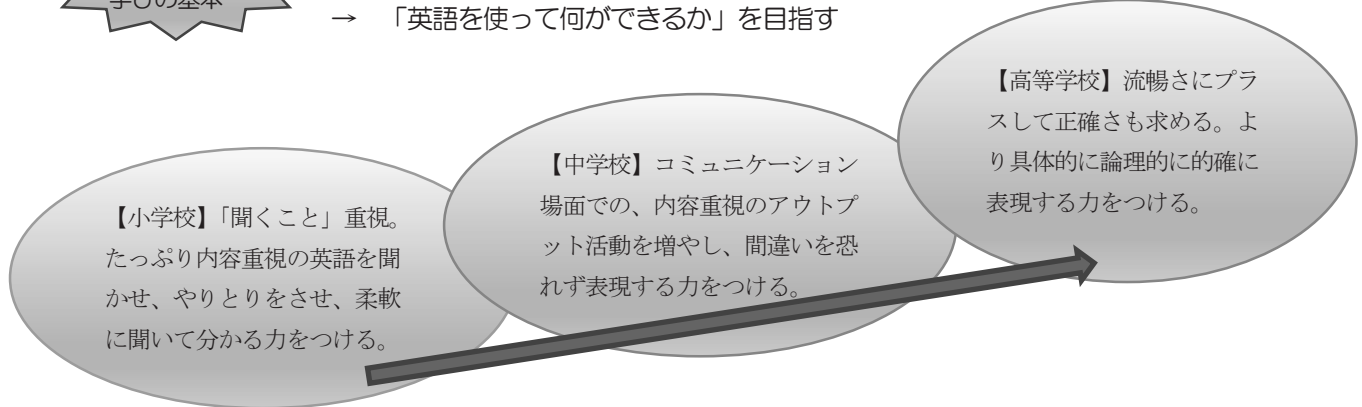


学びの提案（小中高のつながり）

表現力育成の
学びの基本

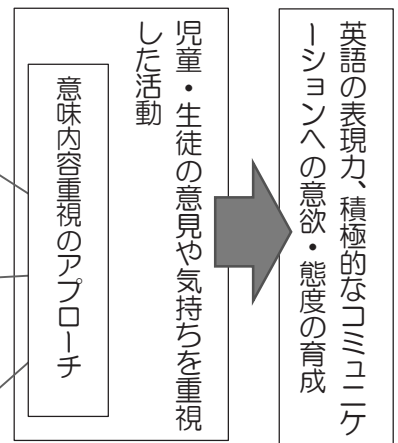
▲言語知識の教え込み → 「英語の正確さ」を目指す

○「伝えたい」「聞きたい」内容重視→児童・生徒の気持ち・意見重視の言語活動
→ 「英語を使って何ができるか」を目指す



小中高の指導法の提案

- 【小学校】 内容重視のインプットとやりとりによる、英語を聞いて意味内容を柔軟に理解するための指導法
- 【中学校】 コミュニケーションツールとしての文法指導、本文の深い内容理解とそれに対する意見・気持ちを表現する指導法
- 【高等学校】 内容重視のインプットから高度なアウトプット活動へつながる、深い内容理解と表現力の向上をねらった指導法



福井県英語学習 CAN-DO リストの作成

—小中高で系統性・統一性のある到達目標の設定に向けて—

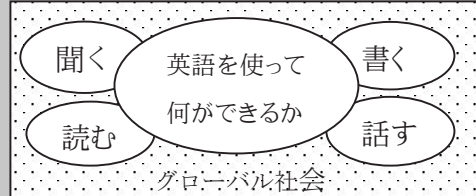
新たな英語教育へ

【従来の英語教育】

- 語彙文法・本文理解中心
- 言語知識習得型学習「英語ができる」

【今後の英語教育】

- 英語を通じた思考力・判断力・表現力の育成



- 実践的な英語力「英語を使って～できる」

英語力向上に向けての指導の改善へ

到達目標：CAN-DO

福井県英語学習 CAN-DO リスト

CEFR（欧州共通言語参照枠）の日本語版 CEFR-J をもとに作成
 学校での指導内容に合わせた改編版 今後の英語教育改革にも対応

参照する

- ・基準が分かる
- ・利用して具体化する→作りやすい

小学校

中学校

高等学校

各学校が実態に合わせた学習到達目標（学校 CAN-DO リスト）を作成

学校間、校種間で系統性・統一性のある学習到達目標

指導改善

- 総合的な英語力「英語を使って～ができる」を目指した指導と評価の一体化
- 小中高を見通した到達目標設定による、小中連携・中高連携を意識した指導
- 到達できていない児童・生徒、到達できた児童・生徒に求められる目標と指導の明確化

英語力向上・内容高度化（平成32年度より）を実現

【小学校】

- ・中学年への外国語活動導入
- ・高学年への英語科導入

【中学校】

- ・授業は英語で行うことを基本
- ・内容に踏み込んだ言語活動の重視

【高等学校】

- ・言語活動の高度化
（発表・討論・交渉等）

福井の教育を全国へ発信－日本の教育センターに近づくために－

発信 1 「福井型 18 年教育」

- 校種の接続(幼児教育支援センター設置、中学校区教育、中高接続事業、人事交流等)
- 授業研究の活性化(校内研修の指針策定、コア・ティーチャー養成事業、小教研等との連携等)
- 福井県の特徴的な取組み(理数グランプリ、白川文字学による漢字教育)
- 福井県教育研究所の機能強化

発信 2 問題解決的な授業づくり

授業構造の解明

授業名人の授業に見る授業の価値

- 授業の「型」でなく、内容や個の実態にあった構成を最優先
- 主体的学習参加のための課題の工夫、人とつながる工夫
- 1 時間完結でなく単元全体のカリキュラムを構成

筆者のこれまでの問題解決的学習の授業構成

- 解決すべき課題の明確化、学び手の問題意識の醸成
- 大いなる試行錯誤のための協働的活動の組織と活動の自由度を保証
- 学んだことの意味を問い直し、新たな問いを生む「個」に戻った振り返りの重要性

「アクティブ・ラーニング」としての条件

- 学習者の問題意識、動機付け(「スタート」は何か)
- 内容だけでない学習の目的の明確化(「ゴール」は何か)

教員の力量形成

「学びの専門家」としての教師に必要な問い

- 【授業前】「なぜこの学習を行うのか」
- 【授業中】「今子どもはどんな学びをしているのか」
- 【授業後】この授業は子どもにとってどんな意味があったのか

授業の見方・語り方と校内研修の進め方が支える

今後「日本の教育センター」に近づくためには研究所の「シンクタンク機能の高度化」が必要
・高いアンテナ、質の高い実践事例の収集・開発、独自の調査分析、アドバイザーとの密接な関係等

県外での発信の全容

月日	研究会名等	演題等
7月 1日	「長野県学力向上ミーティング」	「福井県の学力向上の取組み」
7月 18日	国立教育政策研究所 「外部研究者等による講演会」	教育委員会(教育行政)の学校支援の在り方 －「福井型 18 年教育」の推進－
8月 20日	東京都豊島区 「としま教育フォーラム」学力向上サミット	講演「授業を考える」(福井県の授業実践より) シンポジウム「学力の 2 極化にどう対応するか」
8月 22日	大分県中津市「第 10 回教育実践交流会」	「一人ひとりを大切にしたい教育の実現-協働的な学びを通して-」
9月 4日	東海北陸教育研究所連盟総会・研究協議会	「“教育相談”と“学級経営”を融合した研修講座について」
9月 12日	石川県小松教育事務所管内指導主事研修会	「学力向上につながる授業改善、指導主事の役割」
10月 24日	石川県公立小中学校事務長会	「業務改善に活かすリーダーシップの基礎」
11月 21日	広島県高等学校教務主任研修会	「授業研究を軸とした校内研修の活性化」
1月 10日	広島県「学力向上のための実践交流会」	「授業で育つ子どもと教師－問題解決型学習の創造－」
2月 1日	やまがた教員養成シンポジウム(山形大学)	「ミドルステップアップ研修の展開と成果」
2月 14日	大学との連携による学校活性化フォーラム (宇都宮大学)	「学力調査を核とした福井県学力向上の取組み」

望ましい学級集団育成についての研究

—調査研究「学級の状態と学力の関連」及び小・中学校での実践研究—

教育相談部研究ユニット

調査研究

《目的》

福井県の小学校及び中学校において学級への適応感と学力の関係がどのような状態にあるのかを調査し、仮説を検証する。

《仮説》

- ①「承認感」が高いと学力も高い
- ②「被侵害感」が高いと学力は低い
- ③「意欲」が高いと学力も高い
- ④「満足型」学級はその他の学級型より学力が高い

《有効データ》

[小学校]
31校 41クラス 1010名
[中学校]
27校 56クラス 1546名

《結果》

- ・仮説①は支持された。
- ・仮説②は支持されなかった。
- ・仮説③は小・中とも一部支持された。
- ・仮説④は小学校国語Aで満足型>横型の順、国語B、算数A、算数Bでは、満足型>縦型、満足型>横型、満足型>斜め型であった。中学校数学A、数学Bで、満足型>縦型、満足型>斜め型であった。
- ・小学校では、満足群>非承認群>侵害行為認知群>不満足群の順で学力が高い
- ・中学校では、満足群>侵害行為認知群>非承認群>不満足群の順で学力が高い

《調査研究からの知見》

小学校では、侵害行為認知群の児童への働きかけ、中学校では非承認群の生徒への働きかけが必要

《今後の調査研究の概略》

【調査研究2】

- ①「学級の状態と学力の関連」(SASA2014とQ-Uを用いて)
- ②「学級の状態と学力の関連」(H27全国学調とQ-Uを用いて)
- ③学級の状態と教師の指導行動との関連
- ④同一学級における①と②の変化

実践研究

《目的》

小学校、中学校それぞれにおける、望ましい人間関係能力育成のための学級経営プログラムを実践し、効果を検証する。そして、その結果に基づいた改善プログラムを作成する。

《仮説》

小学校・中学校において、本年度の研究実践案を実施することにより、良好な学級集団の状態へと変化する。

《研究実践案の実践》

[小学校]
ソーシャルスキル教育を柱にした学級活動(月2回程度)の取り組み(5月~12月)

[中学校]
ピア・サポートプログラムと「仲間のよいところ探し」を柱にした学級活動(月1回程度)の取り組み(4月~12月)

《結果》

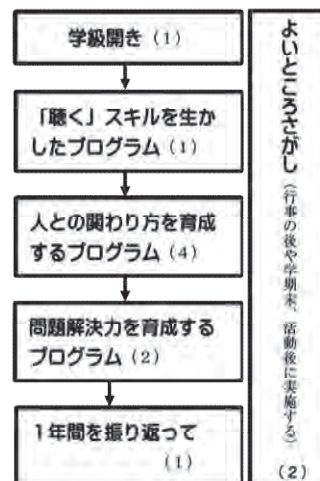
[小学校]
学級のQ-U侵害得点が下がり、本実践が有効に働いたことが実証された。

[中学校]
学級内の女子集団のQ-Uのプロットが満足群周辺にまとまり、学級が成熟に向かう過程にあるため、本実践がおおむね有効だったと考えられる。

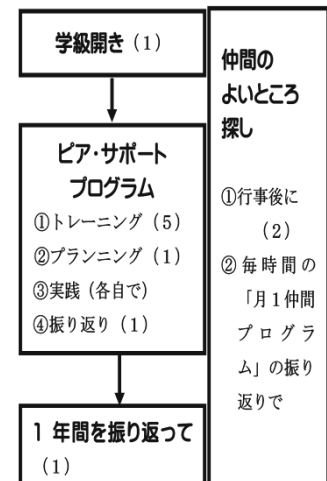
《来年度の方向性と実践プログラムの概略》

- ・小学校では、ソーシャルスキル教育を柱に、「よいところさがし」を融合したプログラムとする。
- ・中学校では、ピア・サポートプログラムと「仲間のよいところ探し」を融合したプログラムとする。
- ・小・中学校ともに月1回、計11回のものを作成、名称を「月1仲間プログラム」とした。

【小学校】



【中学校】



教育相談部の機能強化に関する展望

— 誰をどのように支援していくのか —

教育相談部

